



# アートミーツケア学会 News+Letter

## Vol.6 2010 Spring

### CONTENTS

#### 特集 人を写す・人を描く

姫崎 由美 天野 多佳子 柳田 烈伸 廣田 憲明

- | エッセイ      あそびとまなびの美をめぐって 水野 哲雄
- | レポート      2009年度大会「記憶の居場所」 渡辺 久美
- | インフォメーション      入会のご案内 新任役員メッセージ

一枚のポートレート。

その作品のかけには、モデルと、その人に向き合う作家の姿があります。人に惹かれ、カメラを構えるとき、あるいは絵筆を握るとき、作家は何を感じているのでしょうか。

ここでは、3人の作家を紹介するとともに、人を写す・描くという行為から、人と人のかかわりについて考えてみたいと思います。

## gifted — 誰かが誰かを思うこと

姫崎 由美 知的障害者グループホーム生活支援員 酒田市土門華文化賞受賞

2009年11月3日、大阪で「gifted～誰かが誰かを思うこと」と題し、「哲学する写真」を開催いたしました。

「gifted～誰かが誰かを思うこと」は、今回の話し手である姫崎由美さんの個展タイトルです。姫崎さんはグループホームの職員として働かたわら、知的障害のある人たちのポートレイトを8年にわたりモノクロで撮影してきました。

ファインダーを通し、人と向き合うこと。それは、関わりあいのなかで生まれる様々な事柄を通し、その人を知ること、そして自分を知ることでもあります。

姫崎さんの作品と制作をめぐる、大阪で写真のギャラリーを運営している天野多佳子さんとともに、考える場を持ちました。

### 出合いを大切にしたい

今回の作品を撮りはじめたのは、被写体になっているみんなに会いたいという気持ちからでした。写真を撮りに行くというよりも会いに行くという目的が先にあったので、逆に撮影が目的になると、行き詰って撮れなくなった時期もありました。

撮影は、被写体の人たちが普段の生活、例えばデイサービスなどの一日のプログラムにそって動いているなかで、その人がそこにいて、たまたま私もその場所に居あわせて、魅力的だと思ったから撮らせてもらうことが多いです。偶然的な出合いを、探しながら待っているという感じです。

現在撮影に行っている施設は、数カ所あります。私が最初に勤めていた通所更生施設やそこに通う障害のある人たちが、他の施設に異動するたび、異動した彼らに会いに行くなかでつながりができた施設が多いです。毎回、どの施設に撮影しに行くかは、そのときの勘で決めています。出合いが増え、会いたい人たちも増えるなかで、「久しぶりにあの人会えるといいな、だから今回はここに行きたいな」というように、決め事をせず、ゆるやかに考えます。

被写体の人たちには、みんな一人ひとりにひかれる部分があります。こういう絵が撮りたいというのは、決めていません。その時々に出会う人、出合いを大事にしたいと思っています。

### 人を相手にすることの難しさ

今回出品した作品を撮りはじめて、もう8年になります。仕事をしながらなので、撮影日は年に10回ほどです。不思議ですが、振り返ってみたら、びったり10日をもう何年も続けていました。しかし、行っても一枚も撮れなかったというときもあります。やはり拒否されるときもあるのですが、それがこたえるときとそうでもないときがあります。そういう状況の受けとめ方にもこちらの気の持ちようや、体調などが全部影響します。もちろん、相手のコンディションも影響します。お互いに影響を与えあうことなので、まずこちらがちゃんと向き合えるような精神状態や身体の状態でないとい、撮影に行かないほうがいいと思います。ポートレイトの撮影には、人を相手にすることの難しさがあるように思います。



「森さん—2003, 東京—」



「昭司さん—2003, 東京—」



「洋平さん—2005, 東京—」

### 「愛おしい」を写真で表す

撮影をしているそのときどきで、被写体に対して思う気持ちは様々です。ただ、常に大切にしているのは、自分が愛おしいと思っているときに写真を撮りたいということです。相手の人を、とても愛おしい存在だと思える写真を残したいと思っています。

いいポートレイトは、写っている人の背景までも想像させてくれるような写真だと言われたとき、とても悩みました。言っている意味はわかるのですが、どのようにしたらそのような写真が撮れるのか、その方法がわかりませんでした。悩みながらこれまで撮ってきたポートレイト写真以外の写真も見直しました。そのなかで、ふと自分の写真のいいところを探してみようと思ったときに、「愛おしい」という言

葉を写真で表すことなら、もしかしたら自分にもできるかもしれないと気づきました。それから、その人を愛おしく思える瞬間を撮ろう、と強く思うようになりました。

「gifted」を観た人に、「哀感」があるとされたことがあります。それは、私が愛おしいと思っているときは、ちょっと涙が出そうな気持ちのときだからかもしれません。だから、そういう気持ちのときに撮っている写真を見ると、哀しいと感じる人もいるのではないかと思います。

私にとって、「写真する」ということは、撮ること、見せることも含めて、人と出会う手段になっているように思います。

## 対談 姫崎 由美 × 天野 多佳子

### 人を撮るということ

天野 姫崎さんの写真を見て、実は美術は哲学ととても近いのではないかと思います。

哲学することとは、例えばどう生きていくのかとか、どうやってよりよく生きていくのかということに立ち止まらされて考えさせられるようなことではないのかと思っていますが、美術もそういうところがあると考えています。

姫崎さんの作品からも、そのような印象を受けました。今回の作品が一人ずつの写真だったので、写真の前で立ち止まらされ、みなさん一人ひとりに向き合っているような気持ちにさせていただきました。

写真というのは、「瞬間」なのですが、その人がどんなふうに住んで生きてきたのかを考えさせられる。奥の、というか、その人の背景のようなものに関心が向く。一枚の写真のその姿から、その人がどう普段生きているのだらうと、その一歩奥に心が動かされました。姫崎さんは、撮影しているときにどのようなことを感じていますか？

姫崎 私が師事している松本路子先生に、先生の考えるよいポートレイトについて聞いたことがあります。そのときに、写っている人の背景までも想像できるようなポートレイトがいい写真だといわれました。そういう写真を撮れるといいなと思いながら、今の自分にはまだまだ難しいと感じています。ただ、撮っているとき、その人の背景が見えることがまれにあって、その背景が想像できるときに撮った写真はいい写真になると自分でも思います。

天野 背景が見えるとは？

姫崎 その人の後ろの空気だけが、ゆっくり流れるような感じがします。その人の後ろがパカッと開いて、そこからゆっくりした空気が流れてくるような感じです。そういうことが本当にあります。そういう、その人の背景を自分自身想像できながら撮った写真は、いい写真になると思います。

### 「gifted—誰かが誰かを思うこと」について

天野 「gifted」というのは非常にいろいろなことを思い起こさせてくれるタイトルだと思います。いいタイトルですね。写真と見事に調和されている。タイトルについて少しおきかせいただけますか。

姫崎 タイトルやステートメントを作成するのはとても大変でした。こういう作品にしようという目的を持って撮っていたわけではありませんでした。撮影の目的は、被写体のみんなに会うことだったので、どうまとめるのかというところで悩みました。副題の「誰かが誰かを思うこと」という言葉も、出てくるまではとても大変でした。

私が、障害のある人やその親御さんたちと接するなかで、その親御さんが子どものことを思うというようなところ、まわりの人たちがその人のことを気にかけているということが、どの方にもみられていました。そういう状況は、とても簡単な言葉を使うと、「豊か」だと感じられました。誰かが誰かを思うことを、自分は豊かだと感じている。そういうことが、人に伝えられたらいいのではと思いました。誰かが誰かを思うという行為が、様々ないい気持ちを生み出す。そのことが、この写真で伝えられたらいいと思いました。

天野 「誰かが誰かを思うこと」というのは、なかなか目には見えないことだと思います。それを目に見えるものである写真という形で提示している。それによって、私たちも、向き合うことになる。写真になることによって、こちら側にちょっと問いかけてくれるようなところがあったので、時間をかけて私はみつめることができたのだと感じました。

日程 11月3日(火・祝)  
会場 ニコンプラザ大阪セミナールーム  
協力 株式会社ニコン、Port Gallery T



話し手：ひめさき・ゆみ 知的障害者グループホーム生活支援員。酒田市土門華文化賞受賞。岡山県倉敷市出身。1990年より写真家・松本路子の「エムス・ワークショップ」に参加、作品を制作している。1997年よりNPO法人はれっとの運営する知的障害者のグループホーム（現・ケアホーム）「えびす・はれっとホーム」の職員となり、現在に至る。



聞き手：あまの・たかこ 1969年大阪生まれ。1992年甲南女子大学文学部教育学専攻卒業。マーケティング会社に勤務の傍、美術・写真表現を学ぶ。2005年よりNPO法人影都メディア図書館学芸員として2年間従事し、2007年秋に代表兼ディレクターとして、大阪市西区にPort Gallery Tを設立。

# 人を描くということ — 柳田烈伸さんの場合

手を口にあて、振り向く女性。

身体を斜めに構え、少し上の方からこちらに視線を投げかける男性。

口を一字に結び、じっと何かに見入っている少年。

柳田さんの作品には、“人”が描かれています。柳田さんは1999年から「工房まる」に所属し、絵画制作を本格的にスタートさせました。

以前は写実的な描写を得意としていましたが、その行為に楽しさを感じながらも、「自分が描きたい」というだけの「自己満足」に終わっているように感じていたそうです。周囲からの評価も「上手いね……」という言葉だけで終わることが多かったと言います。

そのようななか「何のために自分は絵を描いているのか」より、自分らしい絵を見いだすために黙々と描き続ける日々を経て、いまポートレート作品を多く制作しています。

実際に会った人、写真や雑誌でみかけた人、様々な人の姿、表情、佇まいに魅かれるようにして、描いているという柳田さん。彼にとって、ポートレートとは何なのでしょう。

—人物をテーマとした作品を制作するようになったきっかけはありますか。

小学生のとき、映画やアニメが好きだったので、それらに登場する人物にあこがれては、そればかり描いていました。また、高校時代、石膏の顔面像や、担任の先生をモデルにして油絵を描いている時、落ち着いた表情に引きこまれ、心地よい充実感に浸って楽しめたという思い出があります。そうしているうちに、人を描くことに少し愛着じみたものを感じるようになったのかもしれない。そして「工房まる」に入ったあと、ある展覧会に来たお客さんに、人物を描いた作品を気に入ってもらい、とても嬉しくて、もっと人物画を続けたいと思うようになりました。



「バスキア」2008年

—どのような人に魅かれ、描こうとおもいますか。

目力を感じるような人、あるいは、何か本能的な強いものを内に秘めていると思わせるような表情をしている人を描きたいです。なんとなく意味ありげな表情をしている人。映画のワンシーンを思わせるような何らかの自然な振る舞いをする時や、ふとした時の落ち着きを感じさせる何気ない表情なども好きです。

—人を描くことの難しさ、楽しさとは。

強く意識して綺麗に描こうとすると、手が動かなくなり描けなくなります。様子を見て、景色や写真をみるなどして自分の気分を落ち着かせたうえで、創作をはじめます。

どちらかという顔を描くのは得意ですが、頭から足までの全体、特に頭部と手足の位置をつかむ事に気をつけなければ、油断するとアンバランスになります。

しかし、何も考えずに自分が描く線と色彩が好きになり、大事にするようにします。これは大切なことだと思うし、そうでなければやっていけないですね。

—作品を制作するときの様子をおきかせください。

いつも決まって床や地面に画板を敷き、その上に乗かるように地べたに向かって描きます。左利きです。制作時間は作品のサイズや気持ちによって変動し、ここ最近では一日で描く時もあるけれど、じっくり描いて一週間かかることもあります。モデルは、工房に来たお客



「手を口に当てるインドの女性」2008年

さんを描くこともありますし、雑誌やネットで写真（できればモノクロ）を探すこともあります。なるべく眼から描きはじめるようにしています。そこから広がるイメージを大切にしています。

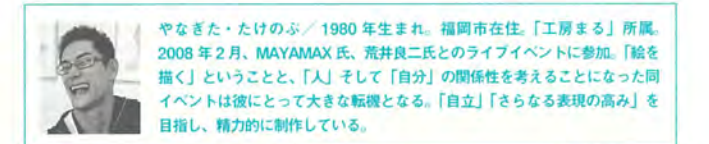
—柳田さんの作品には、様々な国の人が登場しますが、何か理由はあるのでしょうか？

うーん、なんだろう。異文化や、生活環境の違いとかに少しでも興

工房まる：1997年に福岡市にて無認可の福祉作業所としてスタート。2007年に運営母体を特定非営利活動法人化し、現在は、「NPO法人まる」として障害者自立支援法に基づく障害福祉サービス事業である「生活介護」「生活訓練」という2つの事業を行う多機能型事業所として事業移行を行っている。障害のある人はもとより、この社会で生きる私たち一人ひとりが孤立することなく、自分らしく生きていける豊かな社会づくりに貢献、寄与することを目指している。

味をもつことで、創作のテーマの領域がひろがり、楽しくなりそうだったから、と言うのがいいかな。

ある写真集を見て、この人はなぜ変わったアクセサリを身につけているのかとか、この人はどうして真剣な顔をしているのか、など思ったりします。そして写真からよみとったイメージと、文章から得られる情報を元に、色々空想する事が心地よいからかもしれませんね。



やなぎた・たけのぶ / 1980年生まれ。福岡市在住。「工房まる」所属。2008年2月、MAYAMAX氏、荒井良二氏とのライブイベントに参加。「絵を描く」ということ、「人」そして「自分」の関係性を考えることになった同イベントは彼にとって大きな転機となる。「自立」「さらなる表現の高み」を目指し、精力的に制作している。

構成：井尻真子

# 廣田憲明写真展「手話とコーヒー」

子どものころ、コーヒーがただの黒い液体としか思えず、その苦さから愛飲する大人たちは化け物のように感じた。

手話も、コーヒーみたいにビターなことが重なっては、いつの間にか反抗期の象徴へ落ち着いた。

けれど自分の若さは、きっと成長のいたずら。

ちいさなからだを抱き上げてくれたあの実感と愛情をほんのすこし忘れ去るため肯定できなかったから。

手話とコーヒーの向こう側に広がったやさしい光景、そして暮らしの一部と心入るとき、ボクは尊さを知った。

(廣田憲明)



友だち、家族、親戚の子ども、まちで出会った人たち……。コーヒーやジュースを飲みながら、そして手話で話しているうちに、被写体の人は撮られていることを忘れて、すこし油断しているような、リラックスしたやわらかい表情。

2010年2月11日、作品が並ぶ個展の会場でコーヒーと手話を楽しむワークショップが開催され、30人も人が参加しました。なかには、東京からかけつけた人も。

廣田さんはご両親、そしてお兄さんが耳が不自由で、暮らしのなかで手話を覚えていきました。今でも難しいと思うことがある手話。小さいころから思春期にかけては、コーヒーも手話も苦手なことでした。

しかし、自分と同じように両親がろうあ者である友人と話したり、外国の手話を知ったりするなかで、自分が話したい人と話すための言葉として、自分のなかにある手話を肯定したいと思うようになったそうです。

「目を見て話す言葉」「合言葉みたいな言葉」そして、「手話とは、会って話すこと」。喫茶店のテーブルのむこう側で話す笑顔のポートレートが伝えるのは、廣田さんとその人との間にある、かけがえのない時間と相手を大切に思う気持ちなのではないでしょうか。メールでも電話でもなく、会って話すからこそ、伝わるものがあるということを実感させてくれた展覧会でした。



「おずかしい……」



「うんうんっ、Yeah!」アメリカ手話・ASL



「いい感じ。Good vibrations.」

ひろた・のりあき / 1982年和歌山県生まれ。会社員。CODE(Children of Deaf Adults; ろう者の親の子どもたちの会)、写真展「手話とコーヒー」2010年2月8日(月) - 13日(土) Port Gallery T

レポート：森下静香

# あそびとまなびの美をめぐって

水野 哲雄 京都造形芸術大学芸術学部 こども芸術学科学科長 教授

「こども」、「芸術」、「学び」をキーワードにさまざまな表現のカタチ（形式や形態も含め）、そのカタチの発生、始まり、そして人としての根っこや種を「こども芸術」と呼びたいと思います。芸術することが人間の成長や発達にどのような意義や役割をもたらすのか。そのための五感を聞き、引き出すにはどのような方法や視点が必要となるのでしょうか。

## 生きるための芸術

こども芸術学科は、このような問いを胸に2007年4月に30名弱でスタートした学科です。いま、芸術は、才能ある特別な個人の営みから、すべての人へと開かれようとしています。すでに18世紀に「こどもの理性」（エミール）としてルソーの言葉に込められたものは、「共通感覚」（中村雄二郎）といった人間誰もが持っている生来の能力であり、生物学的な才能（L.モホリ＝ナギ）にほかなりません。そこには芸術がいきいきと生きることと直截的に繋がるという期待と意思が認められます。20世紀初頭の「芸術のための芸術」と「生活のための芸術」の論争が、21世紀の現在、生活と芸術との統合・出会いとなってきている感じがします。生活とは生きる次元での活動全般です。その意味合いでは、生きるための芸術が、こども芸術のエッセンスといえるかもしれません。

本学科も今年で3年目を迎えて社会とのつながりが課題となってきています。こども芸術が社会の中でどのような場所を見だし、期待される役割がなんなのか、そして、そのためになにが必要なのか。「こども」は、生活をカタチ造る家庭、そして地域の種であり、未来だといえます。こどものドングリ眼の輝きはどこからくるのでしょうか。こどもは過去ではなく未来を向いています。期待や希望、夢を持つことで時間が未来から今に向かって吹いてきます。このアゲインストの風は、チャレンジ精神を刺激し生きる実感を教えてくれます。こども芸術の精神は、からだで感じ考えることにあります。からだは、絶えず「いま・ここ」と触れあい、世界にさらされています。そんなとき、世界内存在という感覚が、からだの視点から見えてきます。感覚知覚の働きと気づきによる意識化のやりとりは表現することの基盤です。表現とは、なによりも自己の存在を持って応答するきもちやおもいをカタチにする衝動であり、欲求といえます。

## 表現はノンジャンル

こども芸術にとっての表現はノンジャンルです。音楽や絵画といった表現形式に囚われないきもちとカタチの混沌としたキャッチボールにこども芸術のエッセンスがあります。ちょうど、乳幼児の「なぐりがき」や「ぬたくり」のように自発性や衝動、欲求から感じるきもちをカタチにすることと、同時に身の回りのすでにカタチあるものからそのきもちを汲み取ること、両者のキャッチボールです。モノ、ひと、場所、自然といったこのキャッチボールからコミュニケーションが生まれます。そこには、人が生きていくという存在自体の価値やいろんなカタチで「あること」、そしていろんなカタチに「なること」といった、意味や価値を生み出す芸術の営みと課題が見えてきます。

3回生のゼミが立ち上がったことから、これらの課題に本格的に取り組むことができました。6月に1カ月間アートゾーンという



「あそびとまなびのバー」展 2009年6月6日(土)～7月5日(日) / art project room ARTZONE

ワークショップ「あそびとまなびのバー」展の企画が多くの人たちとの出会いとつながりを築く直接のきっかけとなりました。ASP（芸術表現・アートプロデュース）学科との協働でとくくんだこの企画展では、アート作品自体よりもアートする行為や動機を引き出すことがテーマとなりました。あそびとまなびの出会いの場をどう造れるのかということが共通課題として見えてきたことが大きな成果でした。

## あそびとまなびが生き交うところ

7月には人生の晩年になってひよんなことから画を描くことになった人たちのマイアートフル・ライフ展が本学のギャラリーオーヴで開かれ、関連企画で、表現することの楽しさを共有できるワークショップを1回生と行いました。

秋には、戦後中学生だったこども達が描いた絵画展を開くことができました。木水育男という美術教師とその教え子たちがこどもの絵を大事に守ってきた成果です。こどもの絵には多くのメッセージと意義があるということを改めて実感させられました。

10月には、芸術祭典・京「ふれあいステージ2009」の催しにワークショップ・ブースをゼミで出展しました。梅小路公園で開かれたこの催しは、毎年このことはいえ地域のコミュニティまつりとして手作りのフェアに参加できたことで身近な生活意識とのつながりを感じ取ることができたと思います。

このブースが好評だったのか、その後、京都市役所前広場で開かれた御池フェスタや定例の市民フェアにお声掛けをいただきました。11月には、兵庫県篠山のチルドレン・ミュージアムにてワンダー・カーニバルの実行にもかかわることとなり、企画運営面でも多くの気づきと学びを得ることができました。

さらに、定期的に「わにならう」（滋賀県高島市社会福祉協議会主催）のアートサポート活動を行っていたことがご縁で、「畑でアート」というユニークな試みもできました。こどもたちや障害者たちが収穫に訪れるなごみの里という観光農園からのお声掛けです。11月も押しつづまっていた肌寒い時期ではありませんが、竹を伐ったり、パンを焼いたり、とれとれの卵を一つ一つのご飯にかけて食べるのにみな興奮していました。ビニールハウスはひと時のギャラリー工房に早変わりして、ミニコンサートや絵本の読み聞かせ、そして造形あそびと、かつて宮澤賢治が思い描いた農民芸術の香りを想いました。

あそびが自ら作り出すクリエイティブな行為になるときまなびが生まれます。同時に、まなびが自ら面白さを見出しクリエイティブな行為になるときあそびに気づきます。あそびとまなびの両者が行き交うところには何がうまれるのか楽しみです。

**みずの・てつお** 1948年愛知県生。京都工芸繊維大学大学院視覚造形工芸を修了。「意に近なひと」が目標。グラフィックデザインから映像メディアデザイン、そして情報デザインと展開するなかでコミュニケーションのメディアデザインからコミュニケーション自体のワークに関心をもち、大学の入試部長時代に高校生やアトリエなどの美術教育の現場に触れ、表現の枠を超えてのアートワークの実践と研究を課題とする。こども芸術学科の設立準備を経て2007年度より学科長として乳幼児から学童、高校生、大学生、保育士さん、そして作業所などでのアートワークショップを展開している。



「みんな畑でアートしよう」展・高島市アートー 2009年11月22日・愛知県高島市の観光農園高島市

# 2009年度大会「記憶の居場所」

渡辺 久美 三田の家スタッフ

- 日程 2009年12月5日[土]～6日[日]
- 会場 慶應義塾大学三田キャンパスおよび周辺地域（東京都港区）
- 主催 アートミーツケア学会
- 共催 慶應義塾大学、三田の家
- 協力 芝の家、日本ボランティア学会、北国四国町、芝寿会
- 後援 港区芝地区総合支所

## ■プログラム

### ■[1日目]

- 基調講演「記憶の居場所」石内 都
- 分科会
  - A「大学地域連携によるコミュニティの居場所」
  - B「障害とか性ととか」
  - C「アートとケアが出会う場ー保育園・児童館・高齢者施設へアートをお届け：アートデリバリー」
  - D「日本ボランティア学会ジョイントセッション」「強みの思想：路上の流れに手をさす」

### ■[2日目]

- プレゼンテーション（応募者による研究発表、実践報告）
- アートミーツケア学会2009年度総会
- コンサート「うたの住む家 論文発表会」
- 即興からめーる団/うたの住む家実行委員会
- 分科会報告
- ダイアローグ「生活のなかのアート、アートのなかの生活」

鷺田清一・熊倉敬聡

2009年度の大会は、慶應義塾大学三田キャンパスとその周辺地域で開催された。学会だからといって会場をキャンパスの中に限定はしていない。大会参加者が三田・芝のまちへ繰り出せるようにと、キャンパス外にも会場が配置された。これは、慶應義塾大学が三田の家や芝の家の取り組みを通して周辺地域と密な関係を築いてきたことを活かしたものだ。

さて、大会は慶應義塾大学文学部教授の岡原正幸さんの挨拶に続き、写真家・石内都さんによる基調講演で開幕した。石内さんからは、大会を通してのテーマでもある「記憶の居場所」と題して、「傷」への思いが語られた。石内さんの作品の被写体は、身体に残る傷であったり、広島の子供であったりと、悲しい過去を記憶したものが多く、しかしそれらは持ち主が生きてきた時間のかたちであり、今を生きている私たちが過去とを結んでくれる愛おしい存在であることを教えてもらった。

続いてのプログラムは4会場に分かれての分科会。雨が降る中を、参加者たちはまことに点在する各会場へと移動した。分科会Aは、港区が慶應義塾大学と連携して運営している地域交流の拠点「芝の家」で行われ、研究者である教員だけでなく、現場で活躍する学生も交えて、ケアやアート、大学をつなげる居場所づくりについて、可能性や課題、やりがい、悩みなどが話し合われた。受付では普段通り遊びに来ていた芝の子どもたちが参加者を出迎え、登壇者はちゃぶ台を囲んで意見交換するということでも和やかな会であった。

分科会Bでは、NPO法人ノアールが障害とセクシュアリティをテーマに実施したコンテストの審査員たち約15名が入り乱れて、多彩な性について赤裸々なトークを繰り広げ、障害の有無に関わらず、生きていければあって当然の性への欲望とそれを取り巻く問題があぶり出された。

私が参加できなかった分科会CとDでも、目で見て耳で聞いて身体を動かして楽しい分科会が行われたようだ。分科会CではNPO法人ARDAによるアートデリバリー活動についてのオープントークのほか、認知症の人が描いた絵の鑑賞、体奏家・新井英夫さんによる体験ワークショップが用意された。分科会Dでは交通が優先されるようになってしまった路上を生業の場、表現の場とする発表者によるパフォーマンスを交えた対話が場を湧かせたと聞いている。

分科会への参加は無料ということも手伝ってか、とにかくどの分科会も盛況であった。参加者は学会員とは限らない。というより、

学会員でないの方が多かったかもしれないが、アートミーツケアの考え方に少しでも多くの方が触れてくれたならうれしいことだ。

2日目の午前中は、3つの会場が設けられて事前応募者による研究発表、実践報告がなされた。各会場3人ずつの登壇者から各分野での興味深い発表がなされ、質疑応答の時間には質問だけではなく、励ましの言葉がかけられているのが印象的だった。

午後は、三田の家を拠点にうたづくりのワークショップを続けてきたうたの住む家によるミニコンサートで元気づけられた。うたの披露を論文発表と言い張り、面白おかしくステージが展開され、質問に対する回答方法まで徹底されてうたの住む家らしくあった。

続いては、前日の分科会の様子が各レポーターにより報告された。熱のこもった発表であったため、予定の時間より長かかった。これは各分科会の内容が濃密であった何よりの証拠だろう。この分科会報告のレポーターはボランティアで手伝ってくれた学生さんをお願いしていたのだが、当日になって1人だけ学生ではない人が発表することになった。というのも、分科会Bの担当だった学生が、ある意味過激でリアルな性についての議論に触れ、受け止め切れなくなって体調を崩したので、ピンチヒッターを依頼したのであった。上記のような事情は来場者にも伝えられた。これは、分科会で議論された内容を受け容れられないということも、自然な反応であり尊重したいと考えられたからである。

大会最後のプログラムは、学会長の鷺田清一さんと慶應義塾大学教授の熊倉敬聡さんによるダイアローグ「生活の中のアート、アートの中の生活」。ここでは石内さんの「傷」の話から、生活とアートの結びつきまでが語られた。生活にもアートにも共通して言えるのは、人と人の関わり合いの中で豊かなものが生み出されるということだ。

本学会に足を踏み入れてまだ日の浅い私だが、大会を振り返ってみて、学会らしくない学会だと言われている意味がわかったような気がする。研究報告はもちろん、「うた」による論文発表まで包み込んでしまう懐の深さを垣間見だし、私があただけでも、本当に様々な立場の人が参加していたが、誰にとっても何かしら心揺さぶられる発見があったに違いないと思わせる内容の2日間であった。

**わたなべ・くみ** 「三田の家」（教員、学生、商店街が共同運営する場）スタッフ。09年より、港区と慶應義塾大学が共同で運営するコミュニティづくりの拠点「芝の家」に常駐している。芝の家の近くに住み、ご近所付き合いを満喫中。2010年は植物と食をキーワードにコミュニティづくりに取り組む。



# アートミーツケア学会 入会のご案内

## 会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くの方々に賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

## 事業案内

1. 大会の開催  
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
2. 調査研究の推進  
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。
3. 学会誌の発行  
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。
4. ニュースレターの発行  
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。
5. フォーラム、シンポジウムの開催  
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
6. プログラムの開発、プロジェクトの実施  
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
7. 国際交流の推進  
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

## 申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。  
入金先 アートミーツケア学会  
口座番号 00920-4-252135
2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

## 会員種類・年会費

- 個人会員 一般 10,000円 学生 5,000円
- 賛助会員 30,000円

## 役員（敬称略）

- 会長 鷲田清一（大阪大学総長）
- 副会長 畑 祥雄（関西学院大学教授）
- 常務理事 播磨靖夫（財団法人たんぼの家の理事長）
- 理事 秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應院住職）
- 理事 坂倉杏介（慶應義塾大学教養教育センター講師）
- 理事 塩瀬隆之（京都大学総合博物館准教授）
- 理事 志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト）
- 理事 鈴木理恵子（女子美術大学非常勤講師）
- 理事 関口怜子（ハート&アート空間ピーアイ代表）
- 理事 ダーリング・ブルース（美術史家）
- 理事 銅金裕司（メディアアーティスト）
- 理事 中川 真（大阪市立大学院文学研究科教授）
- 理事 並河恵美子（NPO 法人芸術資源開発機構代表）
- 理事 野津 亮（大阪府立大学助教）
- 理事 日野陽子（香川大学教育学部准教授）
- 理事 本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザインセンター/文学研究科准教授）
- 理事 的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
- 理事 水野哲雄（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
- 理事 見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
- 理事 三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
- 理事 森口ゆたか（NPO 法人アーツプロジェクト代表）
- 理事 山口悦子（大阪市立大学医学部付属病院安全管理対策専任医師）
- 理事 横川善正（金沢美術工芸大学教授）
- 監事 太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
- 監事 三浦久子（株式会社エイジレスラボラトリー会長）

## 新任役員からのメッセージ

### ■坂倉杏介

地域コミュニティ形成の拠点として「芝の家」を、新たな学びの空間として「三田の家」を、いずれも大学キャンパス近くで運営しています。「三田の家」を舞台に行われている「うたの住む家」という活動を通して、アートミーツケア学会に出会いました。福祉、医療、教育など様々な領域がごちゃごちゃになった地域コミュニティという現場で、アートの可能性を考えていきたいと思っています。

### ■志賀玲子

幼少時から20歳過ぎまでバレエに熱中し、大学時代には演劇学校に通い、卒業後は現代ダンスの制作・プロデューサーとして、舞台芸術の世界で暮らしてきました。しかし2005年、ALSという神経難病を発病した友人の支援プロジェクトを立ち上げたことから、ケアの世界に関わり出しました。まさに「アートミーツケア」なここ数年です。アートとケアが出会い、それぞれの在り様が根底から揺さぶられるような体験が起きることを願っています。

### ■鈴木理恵子

公共建築物のデザイナー時代に得た「公共とは何か」という疑問から出発し、英国でアートをつかって人々が精神的に健康で希望を持って生きることを促す概念に出会いました。現在も Art, Health, Well-being をキーワードに、大病院小児病棟にいる子どもたちと活動をし、研究を続けています。「アート、見つけた!」「ココにも!」という声をたくさんあげていきたいと思っています。

### ■野津 亮

片井修先生の研究室で共感をテーマとした研究をし、現在は人間、学習、心理、インタフェース、などをキーワードとする研究を進めています。人間と人工システムの関わり合い方について様々なアプローチがあると思いますが、アートという大変興味深い視点から考え、勉強していきたいと思っています。

### ■日野陽子

専門は美術教育学です。特に、視覚障害がある人と無い人で行う美術表現・鑑賞活動に関心を持っています。私自身こうした活動に参加する中で、それまで思いもよらなかった新しい、しかし見える人にも見えない人にも共有される深い美術の意味が生まれる新鮮な体験をさせていただいています。アートは、既にある枠組みの中だけで行われるものでなく、携わる人や場によって変容自在な可能性を持っており、それを受容し生かすことができるかどうかは私達の意識次第だと考えます。本学会も、アートを巡って多様な立場から多様な思いが現実的な力を持って交錯し、常に新しく生成変化し続ける刺激的なものであってほしいと願っています。

### ■水野哲雄

アートの発生源や産生、始まりを研究課題とする「子ども芸術」は、その原型を心身の生きることへの欲求と社会的な教育にあると考えます。クリエイティブに生きることを創造するという課題は、旧来の芸術ジャンルを超えて大きく深く広く、そして個人の枠を超えた共振するフィールドワークが必要だと感じています。本学会が、出会いの場の創設を掲げることはきわめてクリエイティブな社会実験の試みと受け止めています。

### ■三輪敬之

多様な人々が出会い、共に生きていくためには、一緒に「表現の場」を一創りあっていくことが必要になります。そこで「気づきと出会い」、「表現の共創」、これらを「影メディア」によって身一如的に支援できる新しいインクルーシブなコミュニケーションシステムの研究を行っています。最近、生きとし生けるものをつなぐ生命のたからぎやそれを取り込んだケアの現場に関心があります。

\*これまで、役員をつとめていただいた、片井修さん、グロッセ世津子さん、鳥海直美さん、森田ゆかりさん、本当にありがとうございました。

## 編集後記

- 特集記事でご紹介させていただいた、姫崎さん、柳田さんの個展を先日拝見しました。作家が出会った人々。その人々との出会う私。「人」と「出会い」の連鎖。その連鎖の一部に自分があることを、なんだかとても嬉しく感じました。(井尻)
- 慶應大学で開催した2009年度大会は、東京タワーや昔ながらのまちなみを楽しみつつの濃い時間となりました。参加して下さりみなさま、そして慶應大学のみなさま、ありがとうございました。次の大会は12月11日(土)12日(日)に仙台で開催します。東北の冬を楽しみにご参加ください。(森下)

## アートミーツケア学会ニュースレター Vol.6 2010年4月10日発行

発行 アートミーツケア学会 <http://artmeetscare.seesaa.net/>  
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 財団法人たんぼの家の内  
Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501 E-mail.art-care@popo.or.jp